

障害児も年間二百の漢字を

“漢字で教える”ということ、事例で説明しましょう。

「手を洗う」という生活指導だとしますと、黒板にまず「手を洗う」と書きます。すると、好奇心が強い幼児たちは、何を書くのだろうと黒板に目をやります。

そこで、黒板の字を指さしながら「手を洗う」と読みます。そして「今日は“手を洗う”ということで大切なお話をします。皆さんは、どんな時に手を洗いますか。はい、だれか？」と言って発言をうながします。

「手を洗う」という言葉を口にするたびごとに、黒板の字を指さしますので、幼児たちは「ああ、あれは“てをあらう”と読む字なのか」と思っています。幼児期は記憶力が最も強いので、幼児たちはそう思っただけで、この「手を洗う」が頭に焼き付けられます。

ところで、私たちの知識は、五官別にこれを分類しますと、目によるものが83パーセント、耳によるものが12パーセント、その他の合計が6パーセント、ということになっています。目から得られる知識が圧倒的に多いのです。言い換えますと、耳に訴えるだけの教育は効率が良くないのです。

ところが、幼児には字が読めないというので、幼児教育では耳に聞かせる教育がほとんどです。だから、幼児教育は知育には適しないと考えられ、社会性を伸ばす教育や情操を養う教育が重要だ、と主張してきたのです。

しかし、情操でも社会性でも、知性が低くでは教育効果が上がりず、知育は小学校に進んでから、それまでは情操や社会性をつける教育、などと分けて考えるべきものではないのです。

事実、耳に訴えると同時に、「手を洗う」という“目で見る言葉”により幼児の目に訴えますと、幼児は目と耳と二つの器官を使いますので、耳だけに訴えるのに比べて、ずっと良く頭の中に入ります。学者の調査によりますと、「目と耳とによる記憶は、耳だけの記憶の6.5倍も強い」と言われています。

また、足を使えば使うほど足が達者になるように、頭を使えば使うほど頭の働きが良くなりますので、目と耳とを働かせる教育は、耳だけを働かせる教育よりも頭の働きを良くし、理解力が高まりますので、自然と社会性も伸び情操も豊かになることが、明らかに認められます。

つまり“漢字で教える”ということは、今までの耳に訴えるだけの教

育に対して、目と耳とに訴える教育ということで、従来の六倍半もの効果をあげる教育なのです。

なぜそんなに教育効果に違いが生ずるのか、疑問に思われる方もあると思いますので、その理由を簡単に述べましょう。

耳で聞く言葉は「手を洗う」という短いものでも、五つの音声が相続いて発生し、発生と同時に消えてしまいますので、その間、一瞬の油断も許されません。途中の一つの音声を受け取りそこねても、全体がそのために不明瞭になってしまいます。

これが10分、20分と継続すれば、幼児にはもう受け取りかねて、精神を集中させることが不可能になり、落ち着きを失うのです。しかも、言葉が次から次へと襲って来るので、一旦受け入れたものでも定着できず、全く忘れられてしまうのです。

“目で見る言葉”は忘れない

それに反して、目で見る言葉の「手を洗う」は、全体が一瞬に目に入り、その上それがしっかりと受け入れられるまで、消えることなく待っていてくれます。だから、話が済んだあとでも、「手を洗う」という字が「今日のお話は“手を洗う”ということだったよ」と訴えてその記憶を

確実にしてくれます。

だから、「なぜ手を洗うのか」ということも、それに関連して頭の中にしっかりと納まり、「手を洗う」という字をちらっと一瞬見ただけで、それらのことまで連想し、記憶を深めていくのです。

これらのことは初めから予想していたわけではありません。この教育を実践している間にまずその事実が現われ、次にその事実を説明できる理由を追求することで、次第に明らかになってきたのです。

知識の83パーセントが目によるものと言われるだけに、幼児に目に訴えることをせず耳にだけ訴え続けると、幼児の目は刺激を求めてキョロキョロし始めます。こうなると、耳は「聞けども聞えず」という状態ですから、幼児は何も習得できなくなります。

「漢字で教える」教育は、耳と同時に目に訴える教育ですから、そして、好奇心旺盛な幼児の心を十分に満足させる教育ですから、全心全霊を傾けて学習してくれます。そのことは、黒板を見る幼児の目がキラキラ輝いていることでよくわかります。

14年間にわたるこの教育は、実践に足を踏み入れた幼稚園、保育園で、実践を取り止めたという園がないという事実がこの教育のすばらしさをよく証明していると思います。